

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：17104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370555

研究課題名(和文) 認知言語学から見た進行形の制限に関する通時的・共時的研究

研究課題名(英文) Diachronic and Synchronic Study on the Aspectual Restriction on the English Progressive

研究代表者

後藤 万里子 (Goto, Mariko)

九州工業大学・教養教育院・教授

研究者番号：20189773

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、現代標準英語進行形構文現在分詞の語幹がLangacker (1991, 2008)の言うPerfectiveでなければならないという制限があるのは何故かを解き明かすことにあったが、この常識とされてきた制限は、近代～現代話し言葉の、標準を含む多様で自然な英語においては実は存在しないと考えた方が事実と合致するという結論に至った。その論拠として、Webster (1784)の進行形見解を進行形現象を再考すると多岐に亘る進行形現象を説明する核概念とできること、制限を唱えるPickbourn (1789)の論拠の脆弱性をBeattie (1783)との議論比較等により明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study, which has explored the reason for the aspectual restriction on the progressive, has found that the construction in its spontaneity can be considered aspect-neutral. The research on corpora as well as on the Late Modern through Present-day English actual data including epistolary texts, trial records, novels reveals the fact that the progressive with a stative construal has been in actual use. Moreover, majority of Late Modern English grammars employ I am {loving/ fearing} as models of the periphrastic form. Noah Webster (1784: 25), for instance, explains that this form is used to confine the speaker's scope of predication to the actual phenomenal situation denoted by the stem verb of the participle. This insight in fact leads to identifying one basic core meaning of the progressive, which Kranich (2010: 72) has expressed skepticism about achieving, but also in explaining diverse facets of the progressive construction.

研究分野：英語学、英語史、歴史言語学、認知言語学

 キーワード：Aspectual Restriction Webster (1784) Lowth (1762) Murray (1798) The Progressive Stative
Pickbourn (1789) Prescriptive Grammars

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代標準英語文法に関し世界で常識的知識とされてきた「同構文の現在分詞語幹動詞は『状態解釈』を受けることはあり得ない」という進行形構文の制限規則は、これ迄議論の余地はないとされ、同構文に関する膨大で多岐に亘る研究も同規則を前提としている。だが、その理由について明らかにされたことはなかった。その為進行形は例えば - を含めた様々な謎に包まれてきた。

古英語では純粹に名詞であり近代初期に入る頃から動名詞・現在分詞・形容詞の機能も獲得した V-ing 形は進行形以外では相制限はない理由が不明である。進行形の祖先の一つと目され拡充形と称される [be 動詞 + 古・中英語の現在分詞 V-ende] の V-ende 形にも相制限はなく「状態性」が強いことも多く、何故いつ頃制限が生じたかも不明である。

近代・現代の多様な英語、特に口語や口語を反映する進行形の現在分詞には、状態解釈が自然な、以下の(i)等の様な実例が少なからず存在する事実があるが、その事実や分布傾向をどう説明できるか未解明である。

(i) *We are wanting people who show respect for others, respect for New Zealand's cultural...*

『状態解釈』が自然な進行形は、「普通の進行形」ではない特殊な別物として『感情誇張タイプ』等と範疇化されてきたが、この範疇に入るか否かを客観的に判断する指標はなく、大学の入学者募集情報である(i)をそこに入れるのは極めて不自然である。また、普通の進行形との違いも、当該タイプが何故「状態」を許容するのか不明である。

18世紀英文法の最高権威 Lowth (1762: 56) が、模範例に *I am (now) loving* を用いていることをどう説明し得るか判然としない。

Langacker (1991: 209-210) は、「英語の現在形というのは状態しか表せないの、動作を V-ing 形にすることにより時間要素を捨象し be 動詞に結合して『状態化』するという方

法である時点の動作を表現するのが進行だとする。しかし、それでは状態が進行形にならない理由にはならず、既に状態である事象を更に状態化する必要がないから、進行形は状態と相容れないと説明も弱い。言語には、否定辞を重ねて否定を表す二重否定等の様に機能重複や余剰表現など、論理的必然性が認めにくい現象もあるからである。

(2) 英語以外の欧州諸言語には発達せず独特で不可思議な特性を持つ英語の進行形は、近代から膨大な思索と研究の対象で、様々な進行形の定義が試みられてきたが、例外ばかりが目立ち、Kranich (2010: 72) の言う様に、進行形の諸現象は通時的観点からも共時的視野からも包括的に説明できるコア概念を捉えるのは殆ど不可能であるように見えた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、現代標準英語進行形を形作る be+V-ing 構造における語幹動詞 V が、Langacker (1987: 254 - 258, 1991: 207 - 211) に示される認知文法の理論的枠組みにおいて imperfective (より一般的には stative) と呼ばれるものでなければならないという相制限がある理由、即ち *He is knowing it の類が何故容認不可能なのかを解き明かすことであった。

(2) 上記目的達成の為、近代英文法書の英国社会における役割等を含む歴史的・社会的背景等も視野に入れ、標準化の流れと識字率の上昇と共に近代英語史において最も目覚ましい変化を遂げた進行形に関する近代英文法書上の様々な記述を精査し、英語の多様性、特に Insular Celtic 諸言語からの影響等を含む共時的及び通時的な現象について、認知言語学を基盤に置き追求することであった。

3. 研究の方法

(1) 昨今のコーパス調査では、19世紀前半迄テキスト全体での進行形自体の検出頻度

が非常に低く、多くの先行研究でも、進行形は近代中期迄未発達だった構文とされて来た (cf. Beal: 2004: 78)。だが、ジャンルによっては必ずしも低いとは言えない場合もある。

そこで本研究では、例えば 1800 年前後当時の言葉遣いを極めて忠実に活字にした、実際の庶民が家族に当てた書簡等をまず調査した。そこには殆ど現代と同程度の頻度で進行形が生起するものもあり、尚且つ『状態解釈が自然な進行』も散見された。また比較的新しいコーパスで使用文献全体も精読可能な CLMET にも同類が抽出できた。即ち、本研究の対象である『状態解釈が自然な進行形』は、活字になる段階で edit された可能性や、コーパスの収録範囲が活版印刷された口語性の低いものに限られて来たために頻度が低いように見える可能性が推察できた。

更に、未だコーパスの収録対象となっていない文献の中から状態解釈が自然な進行形を、出典の時代背景・書き手の人物像等を確認しつつ、使用文脈も広範囲に精査した。同時に、着手前迄に蓄積してきた資料や先行研究からのデータの再分析に加え、様々な近代の書誌目録を手がかりに、昨今充実してきた Web 上の資料及び貸借・文献複写、ECCO・EEBO 等を含め所蔵図書館でのみ閲覧可能な文献については国内外他大学図書館や大英国図書館に出向き資料を網羅的に収集し実際の資料に目を通しながら考察する手法を取った。

(2) 国内外の学会参加者からや、及び投稿アブストラクトや投稿論文の査読者からのコメント等を中心に、様々な形での情報交換やフィードバックを受けて、論考を補強するための資料も収集した。

4. 研究成果

(1) 今回 4 年間の調査で解った事実は、先ず、進行形及び進行形と相との関係に関わる記述を含む近代から現代迄の英文法書において『状態解釈が自然な進行形』、特に I am

loving 等の模範例としての使用は、本研究着手前迄は例外的なものとして着目していた Lowth (1762: 56) だけに見られるものではなく、それどころか、そちらの方が文法書全体の大勢を占めることであった。これは本研究の方向性に 180 度の転換を迫るものであった。その詳細は、樋口(2016, 2017)に纏めている。

Wischer (2003: 165)は「I am loving の使用は実際にはなかった筈で、Lowth の言及は不適切」と記す。それは、当時の英文法書には、英語には実在しない形をラテン語の動詞活用範疇に無理矢理当てはめるものものあること等が背景として考えられる。16 世紀からラテン語文典には動詞活用を、amo を使って例示する慣例があり、それに倣い英文法書でも直説法能動形の活用例示に動詞 love を使うものは多い。だが、Lowth は脱ラテン語派の文典著述家であり(ii)の様な例は近・現代と実在し決して誤用や意味不明ではない。しかも書簡や小説等では無視すべき程稀とは言えない¹。

(ii) Two years ago, three men were loving her, as they called it. (Elizabeth Barrett-Browning, 1846, from Arnaud: 2003: 16)

また、Beattie (1783: 393)等の言語哲学思索や、その後 19 世紀に最も一般的に用いられた著名ラテン文典も amabam の英訳例に I was loving を付している。これは I was loving に抵抗のある学者が少なかったことを示唆する。

米国人の為の英文法書はアメリカ英語を記述すべきと主張する Webster (1784: 24-26) は「I love 等の単純形が『今に限定されることなく様々に広がる時間帯で成り立っている物事の性質等』を表す」のに対し、「進行形とは、『動詞の意味を今現在等に限る形』で、例えば I am (now) loving は今愛情を実感

¹ Granath and Wherrity (2013)は COHA で 132 例検出しており、1800 年前後の書簡集 *The Clift Family Correspondence* や Jane Austen の小説 (Bando: 2004: 48)でも stance verb を含めばその類は全進行形中 20%程である。

していることを表す」と明確に説明する。これは著者の揺るぎない直観を反映していると考えられる。他にも Blanch (1799: 63) や Osgood (1827: 63)等、これと整合性の高い記述も少なくない。特記すべきは、それらには「進行形の表象は動きでなければならない」という感覚は微塵もないことである。Websterの進行形観は「I am loving 等は稀だが、近接性/集中性を強調する場合は使う」とする現代の Myers (1952: 176-177)、Visser (1973: 1970)、大江(1982: 76-88) 指摘とも整合する。

より広範囲に調査した近代文献実地調査でも、特に口語的な様相を帯びる場合、近・現代英語には上記 (i)(ii)等の様な『状態解釈が自然な進行形』が無視すべきでない頻度で実在することが、例えば COHA 等でも確認でき、本来の進行形には制限はないと考える方が自然であるという結論に至った。

この成果は、現代世界中の英語研究・英語教育・英語学習における進行形に関する常識を覆し、進行形の実態のみならず進行形の本質把握につながる。また、様々な研究者の疑問に対する解決策に資する。分布状況や口語的性質、近代頻度が増加したように見える理由などを考えても、進行形の歴史とも十分に符合することが実証できたと思われる。Kranich (2010: 72)が把握できるのが望ましいが限りなく不可能としている進行形の意味機能の核を、Webster の見地から捉え直すことにより、進行形の多種多様な使われ方を再確認し説明することができる。

(2) 一方、2013 年度迄の調査で制限に最初に言及した可能性が高い Pickbourn (1789)について、入手または検索・閲覧が可能な残存文献全てを調査し再確認できた。更に、18 世紀以降の他の文献記述と比較した結果、その論拠には、進行形自体に関する Pickbourn 自身の所見の独自性の欠如、進行形に出来ない動詞群の輪郭の曖昧さ、糾弾根拠の不

明確さ、背景や同一主張の繰り返しに見られる恣意性、等の点で脆弱性が否めないことも捉えた。その後の簡略化・単純化を目指す文法書記述では、規範のみが繰り返されるだけで、～ の欠陥を補うか敷衍する論拠も示されることはなかった。

(3) 尤も、今日規範意識において制限が存在するのは事実である。本研究では、その要因として Pickbourn の禁則を2つの形で継承した文法書との関係を探った。

一方は、例えば Knowles (1796)や Brown (1851)等 I am loving 非難記述の19世紀に夥しく流通した文法書への影響力である。Knowles (1796)は、当時の人々の需要を満たす禁則集である。Knowles の影響が想起されるのは、文法書の父とされ、禁則を注視する必要のあった Murray の *English Grammar* の第4版と第5版との違いにおいてである。

また、専門家向けの総頁数 1028 の大著 Brown (1851)は、448 冊の先行文法書記述の詳細な批判書である。Bullions は多作で市場を席卷した有名文法書であるが、1845 年版 38, 52 頁では I am loving を模範例に挙げるのに対し、同タイトル書 1853 版 92 頁では Pickbourn の禁則に沿った内容へと変えている。それは Bullions (1845: 38, 52)が Brown から名指し・頁番号入りで痛烈に非難されていることと因果関係が十分考えられる。19 世紀文法書には Pinnock (1830: 147)、Butler (1845: 91)、Reed and Kellog (1880: 216)等 Pickbourn に酷似した文言で倣う物も多数である。

もう一方、そして遙かに大きい要因としては、Pickbourn とほぼ同じ文言で禁則に言及する Murray・Bullions・Kerl・Reed and Kellog 等の流通度である。就中 Murray の *English Grammar* は 19 世紀前半他を全く寄せ付けない圧倒的シェアを誇り世界中で流通していた。版数 69 を超え、発刊・増版・再版数・販売都市・販売期間・販売部数・指定教科書

としての採用率・無数の海賊版の存在・完全コピー又は模倣書数等、データ全てが目を見張る(cf. Lyman: 1921)。19世紀英米文豪達も米国歴代大統領も Murray で文法を学び、小説中でも Murray は文法書の代名詞である(cf. Austin (2003), 樋口(2016))。

Murray の *English Grammar* が、1795年初版から1798年の第4版迄、I am loving を模範例に用いたのは、当初 Murray は文法学者ではなく、初版は殆どが内輪の子女の為に先行研究から寄せ集めた内容で、当時最高権威の Lowth に倣って当然しかるべきであり、Murray 自身も I am loving に抵抗がなかったということが考えられる。1799年の第5版以降一転してその類の進行形を禁じたのは、Murray の私信や初版から1808年迄の様々な版記述の細々とした変遷を辿ると、自分の記述を頼りに自らの英語を律しようとする読者への責任感と良心に基づき、部分的に引いただけだった先行研究や新たな知見にじっくり目を通しながらの改訂活動の一環であったと考えられる。1796年の第2版から5版迄 Pickbourn を動詞時制研究の第一人者の一人として挙げ、進行形に出来ない動詞群表現にも Pickbourn と同様の言い回しを採り入れている。同時に禁則が売りの Knowles (1796) が脚光を浴びたことが豹変を更に促した可能性もある。180度転換が示唆するのは相制限の人為性である。Brown (1851: 380)の論拠も Anderwald (2016: 179)が指摘するように、曖昧で例外が実例として存在する。Pickbourn の著述目的は単純現在形と進行形の相違を見極めることであったが、規範文法に求められた単純化の中で進行形の制限規則だけが一人歩きした可能性を示唆する。

(4) 禁則が受容された要因としては、進行形の本来の意味機能性質も絡むと考えられる。Webster の洞察通り、進行形が、イマ・ココに視野を狭めて事象を捉え、時空を共有する

相手に直に実感を伝える為の形式であれば、それは話し言葉で使われるのも自然である。読み手が情報を受ける迄継続的に成り立つ状態は、単純形で表すのが通常であるだろう。18-19世紀の実際の発話を録音した記録はないので残存文献に少なく、口語に近い表現として書簡等に残るのも当然ということになる。更に口語表現は規範で律する必要はない。

(5) Webster の説明となら(i)の様な「有界性が意識できる状態は状態ではない」という説明では説明が付かない場合とも全く矛盾しない。I'm liking it がしばしば一時的な印象を与えるのも、進行形が関心を単に「今の状況」に向けるからで例えば1時間後の状況は無関係だからだと言える。I'm hoping if you could help me 等の様に進行形が依頼や断りの当たりを柔らかくできるのは、単純形であれば望みが相対的により持続的であるのに対し、今の思いならば「今は外せない用事がある」等といった断る余地を与え得る為、相手の心理的負担を軽くできるからと言える。It's being 5 o'clock が奇妙に響くのは、既に瞬間の事態を更に限定する必要性が薄いからだろう。そして、He is always wanting to learn new things といった様な、誇張を表すとして別分類される場合も十分進行形らしい進行形ということになる。それが強調に使えるのは副詞により「目に入ったときはいつも知識欲旺盛な様子が直に見て取れる」という表現になるからと言う説明も成り立つ。

(6) Websterの進行形解説は例えばHe's driving (activity)やHe is building a house (accomplish-ment)の様な進行形についても説明力が高い。「He drivesはheの属性を広域スパンで見た表現であるのに対しHe is drivingは実際の状況や属性を今に限った表現」ということになる。

(7) 様々な機能を獲得してきた V-ing が総じて aspect-neutral であることとの平行性が説明できる。

< 主要参考文献 >

Pickbourn, James (1789) *A Dissertation on the English Verb*, London: J. Davis.

Webster, Noah (1784) *A Grammatical Institute of the English language*,

Hartford: Hudson and Goodwin.

5. 主な発表論文等

(樋口万里子は後藤万里子のペンネーム)

[雑誌論文](計 4 件)

樋口万里子、素顔の進行形と「状態」との関係を巡る小論、査読有『九州工業大学教養教育院紀要』、第 1 号、29-41、2017 年、<http://hdl.handle.net/10228/00006060>.

樋口万里子、Stativity と進行形、九州工業大学大学院情報工学研究院紀要、査読無、29 号、11-60、2016 年。

樋口万里子、Lindley Murray と進行形の制限、九州工業大学大学院情報工学研究院紀要、査読無、28 号、17-58、2015 年。

樋口万里子、Pickbourn (1789) と進行形の制限、九州工業大学大学院情報工学研究院紀要、査読無、27 号、1-35、2014 年。

[学会発表](計 6 件)

樋口万里子、(後藤万里子のペンネーム)、進行形の本質的意味機能、英語史研究会第 26 回大会、2016 年 4 月 9 日(土)、国際基督教大学(東京都・三鷹市)

Mariko Goto, Emergence of the Aspectual Restriction on the Progressive in Prescriptive Grammars and the Role of its Socio-historical and Linguistic Context, 第 14 回国際語用論学会(The 14th International Pragmatics Conference),

2015 年 7 月 29 日、アントワープ(ベルギー)
樋口万里子、Murray (1798, 1799) と現在進行形、第 31 回福岡認知言語学会、2014 年 9 月 1 日、西南学院大学(福岡県・福岡市)

Mariko Higuchi Goto, Grammar Writing in Late Modern English and the Aspectual Restriction on the Progressive, 第 18 回国際英語史学会(The 18th International Conference on English Historical Linguistics)、2014 年 7 月 15 日、ルーベン(ベルギー)

Mariko Higuchi Goto, Pickbourn and the Aspectual Restriction on the Progressive、2013 年 8 月 6 日、第 21 回国際歴史言語学会(The 21st International Conference on Historical Linguistics)、オスロ(ノルウェー)

樋口万里子、18-19 世紀の文法記述と進行形の制限、第 28 回福岡認知言語学会、2013 年 3 月 25 日、西南学院大学(福岡県・福岡市)

[図書](計 3 件)

樋口万里子、開拓社、「Beattie (1783), Webster (1784) の進行形観」

『中村芳久先生退職記念論文集』2017 年 11 月刊行予定

樋口万里子、朝倉書店、「歴史言語学と認知言語学」、『認知言語学大事典』、査読有、(ページ番号未定)、2017 年刊行予定

樋口万里子、朝倉書店、「時制とアスペクトの認知言語学」、『認知言語学大事典』、査読有、(ページ番号未定)、2017 年刊行予定

[産業財産権]

○出願状況(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 万里子 (GOTO, Mariko)

九州工業大学・教養教育院・教授

研究者番号: 20189773